

巻頭言

臨床心理学部 学部長 濱野清志

トランプ新政権が始まった。これほどまでに物議をかもしながら、そして、始まりから大きな反対集会在活気に満ちるアメリカ大統領はかつていなかったのではないだろうか。政治のダイナミクスについては分からないことが多いのだけれど、クリントンからブッシュへ、あるいは、ブッシュからオバマへとといった民主党から共和党に、あるいはその逆にという変化ではなく、これまでにはない何かが大きく動いたという感じを受ける人は多いのではないだろうか。

トランプへの反対の声はさまざまところで大きく挙がっているが、トランプが大統領に選ばれたのは紛れもない事実であって、選挙をめぐってもいろいろ事情は語られているものの、アメリカ国民の一定数がトランプを支持しているというのも事実だろう。この大きな集団精神の動きは、戦後70年を超えて、世界的な大戦争に到らないように多くの国が注意し、自由、平等という精神のもとに先進国によって進められてきた民主的な平和構築の歩みが金属疲労を起こして折れかけている、そんな危機状態を象徴的に表す動きのようにも感じられる。

他人のことになどはやかまっていられない、自分の身は自分で守る、自分のことを大事にして何が悪い、そんな叫びがトランプの背後に響く。そして、その叫びは、地球規模でグローバルに多くの人々の心の深層で強く響き、共鳴している。しかし、単純なナショナリズムに回帰し、身近に仲良しグループを形成して、その内側だけを見て暮らすことができるほど、私た

ち現代人は素朴ではない。私たちは、確実に私たちの外部に他者が存在し、その他者との交渉、交流なしには私たち自身の世界を存続させることはできないということに気づいている。しかし、それはたいそうエネルギーのいる、忍耐強さを求められる事態である。そんなことには目をつむって、知らなかったことにしたい。そんな転換ヒステリー的な集団精神現象が「問題を起こしそうな人間は誰も国内に入ってくるな」というトランプの叫びを支持しているのである。

もはや地球上のことは、どれをとってみても、相互に関連し、影響しあう多層的で複雑なネットワークから切り離して考えることなどできないのが現代である。かの国の出来事は、さまざまなかたちで、私たちの国の問題として現れる。だからこそ、自分自身の内なる心の叫びにしっかりと耳を傾け、心に吹き荒れる嵐をなかったことにせず、かといってそのままに振り回されない、そういう精神の力を私たち一人一人が養っていかねばならない時代になってきているのである。マインドフルネスを真に生かすということは、そういうことでなければならない。そこには、臨床心理学の培ってきた智慧が大いに役立つはずである。

この時代こそ、臨床心理学の真価が問われるときなのである。私たちが、個々の心理療法の腕を磨き、個々の人々を大切に心理臨床の視点を失わず、同時に、その知恵をもっと広い社会に還元する方法を真剣に模索すべきときが来ているのである。